

明治期（1868-1912）日本におけるフレーベル主義幼稚園受容の研究
—教育雑誌『文部省雑誌』並びに翻訳書を通じての考察（1）—

小 笠 原 道 雄*

A Study on the Reception of Fröbel's "Kindergarten" in the Meiji-Period (1868-1912)
in Japan—In Consideration of Educational Magazine; MONBUSYOU-ZASHI and the
Translation-Books (1)

Zur Fröbel-Rezeption in Japan in der Meiji-Aera (1868-1912) —
Die Einführung der Kindergarteninformation durch pädagogische Zeitschriften vom
MONBUSHO und ausländische Literatur—

Michio OGASAWARA

Im November 1876 (Meiji 9) wurde der angegliederte Kindergarten von Tokyo Lehrerbildungsschule für Frauen gegründet. Das war der richtige Anfang der Kindergarten-erziehung in Japan. Das war etwa 30 Jahre nach der Gründung des ersten Kindergartens von Fröbel, nur drei Jahre später als die Gründung des öffentlichen Kindergartens in den Vereinigten Staaten. Das heisst: Auch in Japan wurde nach der Meiji-Restauration ziemlich früh der Kindergarten eingerichtet. Die Einführung der Kindergarten-erziehung nach dem Modell des Fröbelischen Kindergartens vom Westen bedeutete allerdings für Japaner die Rezeption einer völlig fremde Kultur. Deshalb brauchte man viel Zeit und Mühe, um dieses Modell zu verstehen und das im Boden der japanischen Kultur einbürgern zu lassen. Die Zehner Jahre von Meiji (1877-1886) waren die Periode, in der man nach dem Ziel und der Form der Kindergarten-erziehung suchte. Dabei beschäftigten sich die Leute mit der Frage, wie man die Kindergarten-erziehung als vom Westen eingeführte fremde Kultur ins reale Leben der Japaner einbürgern kann und soll. Durch diese mühsamen Prozesse verbreitete sich die Kindergarten-erziehung im modernen Japan. Im folgenden Teil werde ich die Rezeptionsprozesse der Information über Fröbelische Kindergarten-erziehung betrachten. Dabei wird die Auseinandersetzung mit den ausländischen Kindergartenbüchern im Mittelpunkt der Betrachtung stehen.

キーワード：フリードリヒ・フレーベル Friedrich Fröbel, 幼稚園 Kindergarten, 明治期 (1868-1912) Meiji-Period (1868-1912), 文部省雑誌 Magazine of the Ministry of Education : MONBUSYOU-MAGAZIN, 関信三 (1843-79) Seki Shinzou (1843-79)

わが国における二つの幼稚園観の起源：

「幼稚園ノ課業ハ畢竟小学校ノ遊戯ナルヲ以テ遊戯学校ト称スルモ亦可ナリ」

（キンダーガルテンの説, 「米国教育寮年報抄訳」1874（明治7）年12月28日『文部省雑誌』より）

「善良ナル親族ノ自家教育ニ模擬シ, 務メテ学校ノ方法ニ倣ハザルヲ可」

（「ドウアイ氏幼稚園論ノ概旨」(中村正直訳稿, 1876（明治9）年5月15日『教育雑誌』（1876年『文部省雑誌』改名）より）

所属

*広島文化学園大学 学芸学部 子ども学科

Hiroshima Bunka Gakuen University Faculty of Arts and Sciences Department of Childhood Studies

問題の提起

近時、わが国の幼稚園義務化の動きが日程に上がりはじめた。政府の教育再生実行会議の動きがそれである。

周知のように、幼稚園制度は明治政府の学制（明治5年）発布に遅れること4年、明治9年、現在のお茶の水女子大学の前身、東京女子師範学校の附属幼稚園として導入された。そこには明治政府の教育に対するなみなみならぬ意気込みが感じられる。国際的にみれば、西欧諸国では、フレーベルの考案した幼稚園が基本となりながらも、それぞれの国情を背景に受容され変容しながら展開され、定着していく。それに対してわが国の場合はどうであったのだろうか。そこには、幼稚園教育という概念自体が不明なままに、外国の制度、内容、方法をひたすら模倣するという政府の意気込みだけが強力に作用し、まさに政府主導の形式重視の、しかも一律的な幼稚園教育が展開され、定着することになったと思考される。

1840年、〈一般ドイツ幼稚園〉として発足した幼稚園は、全体的にフレーベル式幼稚園として、今日、世界中の幼稚園における教育活動の基準として、つまり教育の方法、内容の規準を提示してきたと評価されている。具体的には、例えば、子どもの遊戯を中心とした教育活動、子どもの発達を促す教具の使用、さらには遠足、自然観察、身体運動等々の個別的なカリキュラムである。

そのようなフレーベル式幼稚園の中でも、今日最も成功した制度上のアイデアは、幼稚園教育と学校教育を接続する〈子ども学校（キンダー・シュウレー）〉であると言われて、各国ですでに定着しているものである（フランスでは〈母親的な学校〉の名称である）。

わが国にフレーベル主義幼稚園が導入されて140年、今度こそ、子どもの発達を真に促す幼稚園としてその義務化が図られることを切望する。その前提としては、フレーベルが考案し、すでに世界各国で現実的な成功例として定着している幼稚園と学校の〈接続学校〉の試行とその評価である。小学校の空いている教室を活用して毎週、教師や保育士が幼稚園、保育所の年長児を学校に引率し、小学校で集団的な生活を体験させることが、幼稚園の義務化の前提であ

る、とフレーベルをながく研究してきた筆者は提言したい。

以上のような問題意識を抱きながら、本稿は日本における幼稚園制度や幼稚園活動の方法や内容の問題の源流を明治政府の主導で導入されたフレーベル主義幼稚園の状況をたずねることによって日本化された幼稚園の問題点を解明することを課題としている。

はじめに

1876（明治9）年11月、東京女子師範学校に附属幼稚園が創設され、日本の幼稚園教育は本格的にスタートした。それはフリードリヒ・フレーベル（Fr.Fröbel, 1782-1852）によるキンダーガルテン創設から36年後のことであり、アメリカにおける公立幼稚園開設からわずか3年遅れてのことであった。従って、わが国でも明治維新後、かなり早い時期に幼稚園の設置がなされたのであった。しかし、欧米のフレーベル主義幼稚園をモデルとした幼稚園教育の導入は、当時の日本人にとって異文化そのものであり、それを理解し日本の土壤に定着させるためには多くの時間と方策を要した。明治10年代（1877-1886）は、導入された異文化としての幼稚園教育を日本人の現実の生活のなかにいかにして根付かせるのか、その目的や在り方について模索された時期でもあり、そうした過程を経て、幼稚園教育は徐々に普及し、近代日本における幼稚園教育の基本的形態が形成されていったと考えられる。

以下、本論ではフレーベル主義幼稚園教育の受容について、その第一報として外国の幼稚園に関する紹介論考を含む書物を中心に考察をおこなう。

（なおその際、本稿では今日、この期のわが国の幼稚園教育の成立や展開に関する研究の第一人者と目される日本教育史家湯川嘉津美の文献、『日本幼稚園成立史の研究』（風間書房、2001年）を参照し、引用しながら課題の究明を図る。）

*一般に、フレーベルの幼稚園について、「フレーベル主義幼稚園」と「フレーベル式幼稚園」という呼称があるが、前者は、フレーベルの教育思想の原則を重視し幼稚園教育を行うのに対して、後者は、フレーベルの教育遊具（教具）の使用等の実践に注目して幼稚園活動を行う点に特色がある。

I. 日本におけるフレーベル主義幼稚園教育の受容

1 フレーベル主義幼稚園情報の受容

従来から日本におけるフレーベル研究では、日本の幼稚園は欧米のフレーベル主義幼稚園、とりわけアメリカの幼稚園をモデルにして出発したとされている。当時翻訳された幼稚園書のほとんどがアメリカで定評ある幼稚園書であったというのがその理由である。しかしその根拠に対しては、明治初期に日本に輸入された諸外国の幼稚園に関する書物についての総合的な調査と分析が、必要と考えられる。とりわけ、フレーベル主義幼稚園教育の在り方が、どのような文献を通じて日本に紹介され、受容されたかを外国文献と日本側の資料との比較検討によって実証的に明らかにされることが必要である。

以下、実証的な精査の一例として明治期初期に刊行された教育雑誌の分析を行う。

1) 文部省刊行教育雑誌による幼稚園情報

文部省は1873（明治6）年から『文部省雑誌』¹⁾ [図1] を刊行し、各種の教育情報を提供したが、翌年からは海外教育雑誌、教育書の抄訳等を掲載するに至り、1876年に『教育雑誌』と雑誌名を変更するとともに海外の教育情報を紹介する情報誌となった。とりわけ1876年から1879年にかけてのこの期間は、わが国の幼稚園創設とかかわって海外の幼稚園情報が数多く紹介され、実践の参考に供された。

以下、これら文部省刊行教育雑誌に翻訳された幼稚園関係記事の分析を通じて、当時、いかなる幼稚園情報が紹介され、受容されたのかを具体的に考察する。

- (1) 1874（明治7）年12月28日、第27号「幼稚園（キンダーガルテン）の説」（米国教育寮年報抄訳）²⁾
- (2) 1875（明治8）年2月28日、第3号「幼稚園、児童看護舎、幼稚園舎、改良舎、上四舎ノ略記」（独逸教育論摘訳）³⁾
- (3) 1876（明治9）年5月15日、第4号『ドウアイ（Douai, A.）氏幼稚園論ノ概旨』（中村正直訳稿）⁴⁾
- (4) 同上、「フレーベル氏幼稚園論ノ概旨」（中村正直訳稿）[図2]⁵⁾
- (5) 1877（明治10）年1月20日、第24号「教育トハ何ヲ謂ウカノ問イ」（米国教育雑誌抄、

江木高遠訳）⁶⁾

- (6) 1877（明治10）年3月10日、第29号「幼稚園」（独逸教育書抄、近藤鎮三訳）⁷⁾
- (7) 1877（明治10）年11月10日、第48号「手ノ使用及び遊戯ノ論」（仏国教師必携抄、マリパプカルパンテエー女著、小野清照訳）⁸⁾
- (8) 1878（明治11）年1月29日、第55号「セントルイス府幼稚園」（監督雑誌 第9号、在米留学生監督目賀田種太郎郵致）⁹⁾
- (9) 1878（明治11年2月21日、第58号「遊戯ノ性質ヲ論ズ」（米国新英倫教育新誌抄、井ルセム、チイ、ハルス氏ノ説、海老名晋訳）¹⁰⁾
- (10) 1878（明治11）年12月9日、第84号「幼稚園設立法」（関信三述）¹¹⁾

これらの内容は、外国の幼稚園の状況、幼稚園論、さらには保育方法論と多岐にわたる。国別ではアメリカの情報が最も多いが、ドイツ、イギリス、フランスの情報も取り上げられており、一般に言われるアメリカ一辺倒ではない情報の収集がみられる点に注目したい。さらにこれらの情報を詳細に分析してみよう。

(1)「幼稚園ノ説」は、わが国最初の本格的なフレーベル主義幼稚園の紹介であり、また“キンダーガルテン（Kindergarten）”という言葉を用いた最初の事例である。そこでは幼稚園教育の主旨が三点に要約され、また幼稚園の日課も具体的に例示されている。

この三点にわたる要旨にはそれぞれ詳細な解説が添付されているが、要約すれば、幼稚園は悪環境から幼児を保護し、良い環境のなかでその発達を助けて子どもの教育の基礎を作り、また婦女子に教育の大意を教えるところであるということである。また、ここには「幼稚園ノ課業ハ畢竟小学校ノ遊戯ナルヲ以テ遊戯学校ト称スルモ亦可ナリ」との文言がみられる。その「遊戯」とは、第一に遊具を用いた遊戯があげられるが、その他歌曲を付しておこなう運動遊戯や飛鳥、遊魚あるいは農夫等の動作挙手を模倣する遊戯も紹介され、その教育的意義が述べられている。さらに「幼稚園冬夏演習ノ課業表」と題された「課業」が月曜日の9時に開始され土曜日の午後1時まで詳細に示されている。そこでは、幼稚園の課業が小学校の授業時間割のごとく並んでおり、まさに「遊戯学校」の感がある。課業主義と批判された明治期のわが国の幼稚園の原型がうかがえる。

(3)「ドウアイ氏幼稚園論ノ概旨」と(4)「フレーベル氏幼稚園論ノ概旨」は、いずれも東京女子師範学校長中村正直(1832-91)によるものである。幼稚園の開設を直前に控えて、その啓蒙宣伝のために掲載したものと考えられる。「ドウアイ氏幼稚園論ノ概旨」については、その人名より比較的早くから原典が特定されている。原名で示せば“Douai, A., The Kindergarten. A Manual for the Introduction of Froebel's System of Primary Education into Public School; and for the Use of Mother and Private Teachers”, (1871)がそれである。この題目からわかるように、この書は幼稚園教育の実践に役立てる目的で著されたもので、おもに幼稚園の運動遊戯や歌を紹介したものであった。このうち中村は本論の一部を訳述して「ドウアイ氏幼稚園論ノ概旨」としてまとめ、幼稚園の主意、幼稚園の施設設備、教師、子どもの遊び等についてわかりやすく紹介した。

なお、A.ドウアイの本書はその後、東京女子師範学校の初代監事(園長)に就任する関信三(1843-79)によって『幼稚園記』全四巻(1876-77)¹²⁾として翻訳出版され、創設期の幼稚園教育の実践に多大な貢献をなしたことは一般によく知られている。

(6)の「幼稚園」はドイツの教育書の抄訳である。幼稚園発祥の地ドイツの情報は以外に少なく、本論を含め二件にとどまっている。だが、フレーベルの幼稚園の目的、教育内容・方法などについて、ペスタロッチー(J.H.Pestalozzi)やルソー(J.J.Rousseau)といった教育思想家の理論と比較しつつ論じられており、注目される。要約すると、フレーベルの幼稚園は、いわゆる養護施設ではなく、家庭教育の足らざるところを補う教育施設として設立されたものであり、その教育は集団のなかで行われる。そして、幼稚園の教育はペスタロッチーのいう母親による自分の家での教育にとどまらず、家庭で行い得ない他人との交流を通じて子どもの発達を保障するものであり、それ故に、幼稚園は家庭教育を十分に行いうる家庭にいても必要なものであると述べられている。ここにはイギリスの貧民学校や慈善学校とは異なる思想での幼稚園思想が紹介されている点が重要である。しかも、幼稚園はまた、「父母貧困ニシテ小児ヲ養育スルノ義務ヲ尽ス能ハザル者ニ緊要ニシテ欠クベカラザル」施設としても紹介されている。その場合でも「善良ナル親族ノ自家ニ模擬シ、

務めテ学校ノ方法ニ倣ハザルヲ可」とするように、幼稚園は家庭教育の補助ないし代替施設として捉えられている。これはドイツで発達した貧民を対象とする、所謂「民衆幼稚園(Volkskindergarten)」を指すものであろう。

前述のアメリカの幼稚園情報が課業主義的な「遊戯学校」であったのに対して、ドイツのそれは学校的な要素を排除して家庭的雰囲気の中かで保育をおこなう「遊戯場」であったといえよう。

一般に、わが国の幼稚園はアメリカのフレーベル主義幼稚園をモデルとして出発したとされるが、同時に上述のようなドイツの幼稚園情報も紹介されており、それは日本人に幼稚園に対する二種類のイメージを提供することになった。この点はその後のわが国の幼稚園を考える上で極めて重要である。

(10)「幼稚園創立法」は東京女子師範学校附属幼稚園監事、関信三がいろいろな外国幼稚園書を参照してまとめたもので、その題目が示すように、幼稚園の手引書である。関は同年4月、同名の冊子を田中不二麿(1845-1909、日本の幼稚園創設者とされる文部大輔(臣))に提出しているが、『教育雑誌』掲載にあたり、その一部を手直しして、一般の幼稚園創設の手引きとしたのである。36頁に及ぶ本記事は、邦文の幼稚園書が希少であった当時、各地で幼稚園設立にあたって大きな影響を与えたものと考えられる。

その他、(11)として「手ノ使用及遊戯ノ論」¹³⁾

(1877(明治10)年11月10日、第48号)、(12)「幼稚園ハ学技芸其他百般事業ノ初歩タルヲ論ズ」¹⁴⁾(1878(明治11)年12月17日、第86号)等があるが、いずれも幼稚園の遊具遊びや作業の教育的意義及び効用に関する論稿である。特に、後者は、フレーベルの論に基づいて次のように述べている。「フレーベル氏ハ恒ニ幼稚ヲシテ其見ル所ノ物ニ就テ必ズ其手ヲ触レシム。一(略)一フレーベル氏ハ故意ニ幼稚ノ手ヲ使用セシメテ彼等ヲ教育センヲ要ス。」すなわち、手を使つての遊びや作業の教育的意義が詳細に記述されているのである。

以上のように、文部省刊行教育雑誌には1871年以降、西洋の幼児教育の情報が次々に掲載され、外国の幼稚園の状況から保育実践に関わる論まで翻訳・紹介された。全国的規模でのこうした幼稚園教育の紹介は、幼稚園関係者のみならず

らず、広く人々に幼稚園教育の意義や内容・方法を知らせた。幼稚園に関する文献の少なかった当時、これらの幼稚園記事は幼稚園を設立しようとする者にとって、貴重な情報源となったであろうことは疑いえない。なかでも創設期の幼稚園教育に多大な影響を与えたと推察される「幼稚園ノ説」及び中村正直の幼稚園論紹介は重要である。

II. 外国文献による幼稚園教育情報の受容

湯川の研究からは¹⁵⁾、従来の研究では、1876（明治9）年に創設された附属幼稚園が、どのような経路で導入され、また当時の幼稚園関係者がそれをいかに理解したかについての体系性をもった歴史的＝実証的な考察はなお十分とはいえないと判断される。

一般に幼児教育の方法に関しては、明治・大正期の幼稚園教育がアメリカで実施されていたフレーベル式幼稚園を規準に輸入され進展したとされ、田中不二麿、中村正直、関信三、A.L. ハウ（How, Annie Lyon 1852-1943）らを中心に説明がなされるが、これらの人々が実際に参考とした外国の幼稚園書の精査が不完全なままなのである。例えば、わが国におけるこの方面での第一人者と言われた岡田正章（1925-2014）は、「明治初期における外国幼稚園論の研究」¹⁶⁾（1963年）において、明治初年に輸入された翻訳された外国幼稚園書について調査を行い、明治初期の実践を支えた文献について考察しているが、なお不明な点を数多く残しており、その検討は不十分なままであった。従って、ここでは湯川の実証的な研究に依拠しながら、明治初期の幼稚園教育の導入について、いかなる幼稚園教育情報が紹介され、それを当時の幼稚園関係者はどのように受容していったかについて、保育の参考とされた外国の幼稚園書の分析を通じて検討する必要がある。

1) 翻訳幼稚園書の幼稚園情報

幼稚園創設と相前後して、文部省は教育雑誌に幼稚園関係記事を掲載し、啓蒙・宣伝に努め、また、外国幼稚園の書を翻訳して実践に備えた。ここでは、桑田親五訳『幼稚園（おさなごのその）』（文部省、1876-78年）、および関信三訳『幼稚園記』（東京女子師範学校、1876-77年）を取り上げ、創設期幼稚園情報について検討してみよう。

(1)『幼稚園（おさなごのその）』とその内容

『幼稚園』の原典は、イギリスのロンゲ夫妻（Ronge, Johann and Bertha）が著した“A Practical Guide to the English Kindergarten (Child's Garden), for the Use of Mother, Nurses, and Infant Teachers: being an Exposition of Fröbel's System of Infant Training: accompanied by a Variety of Instructive and Amusing Games, and Industrial and Gymnastic Exercises, also numerous Songs set to Music, and arranged for the Exercises”（以下、『A Practical Guide』と略す）である。

非常に長い書名であるが、その分、具体的な内容を説明した書名でもある。本著はイギリスにおけるフレーベル主義幼稚園に関する最初の文献であり、1855年に初版が刊行され、1877年には第10版を重ねるなど、多くの人々に読まれた文献であった。

ロンゲ夫妻についてはすでによく知られた人物であるので詳細は省略するが、妻のベルタ（Bertha）がフレーベルの幼稚園の思想に共鳴し、ドイツにおけるフレーベルの幼稚園運動を支援していた女性として知られ、夫とともにイギリスに渡ってからは1851年、ロンドンにドイツ人指定の保育を手がけた。これがイギリスにおける最初のフレーベル主義幼稚園となった。1854年からはイギリス人の子どもも受け入れられるようになり、言葉もドイツ語から英語に切り替えられた。同じ年、1854年、ロンドンで教育博覧が開催された。そこでドイツのフレーベル主義幼稚園運動のリーダー、ベルタ・ホォン・マーレンホルツ・ビュロー（Berth von Marenholtz-Bulow, 1810-93）は幼稚園の普及を図るためにフレーベルの遊具を出品したが、ロンゲ夫妻もこの機会に彼らの幼稚園をイギリス人に公開し、同時に、ロンゲ夫人が幼児教育の重要性を説く講演をおこなった。この講演は大きな反響をよんだことが伝えられている。こうして教育博覧会における幼稚園の紹介は、イギリスにおける幼稚園の普及の契機となった。また、アメリカにおいても同博覧会に参加したバーナード（Barnard, Henry 1811-1900）の幼稚園に関する報告がひとつの引き金となって、フレーベル幼稚園運動が展開されるに至ったことは周知の通りである。

さて、湯川の詳細な調査によれば¹⁷⁾、桑田の翻訳書では‘Some account of Frederick Fröbel,

founder of the Kinder Garten Schols' の箇所が欠落しているが、おおむね、原文にそって翻訳されている。幼児期の教育の重要性をのべた「導入」(Introduction) からフレーベル幼稚園の内容、すなわち、具体的な遊具 (Spielgabe (gift)), 作業具 (Beschäftigung), 運動遊び (Bewegungsspiele) 等、所々の省略があるがほぼ正確に翻訳され、わたしたちは、保育の実際について、具体的に知ることができるのである。

翻訳者の桑田親吾は、教育関係の出身ではなく、法律学を修めて判事となった人物である。当時、その語学力をかわれて文部省の翻訳事業に携わったものと推察される。他方、何故、幼稚園の本場のドイツではなく、イギリスで出版されたロンゲ夫妻の書が最初に翻訳されたのかは不明である。だがそれが当時すでに9版を重ね、評価の高かった幼稚園教育の基本文献であったことは確かであり、それがたとえ偶然であったとしても、当時の日本にとって翻訳するのに適切な書であったことは間違いない。湯川の調査によれば¹⁸⁾、現在この書物は国立国会図書館と筑波大学附属図書館(東京女子師範学校附属図書館旧蔵書)に所蔵されているが(この書物については筆者も確認した)、いずれも1877年版(10版)であり、「幼稚園」で使われたものとは異なるが、第3版(1865年、アメリカ・イエール大学図書館蔵)と比較したところ内容はほとんどかわらない、とのことである。

全体的に、『幼稚園』には幼稚園での遊具遊びと作業、運動遊戯についての詳しい紹介がなされており、邦文で書かれた幼稚園書がきわめて少なかった当時、これらの内容は附属幼稚園の実践において、重要な手引きとなったことはまちがいなさう。しかし運動遊戯に関していえば、『幼稚園』には原典にある楽譜(イギリスで普及した独自の楽譜)がつけられていない。湯川はその理由として、「西洋音楽の知識のない当時、楽譜をつけてもそれを用いることはできないと考えて、削除されたようである。」¹⁹⁾と説明している。周知のように、楽譜に関しては、最初の日本語版はドイツ語版『母の歌と愛撫の歌』(1844)を英語版“Mother-, Play-, and Nursery Songs, poetry, music and picture for the noble culture of child life, with notes to mother”(1878)から、翻訳者兼発行者である、アメリカの婦人宣教師A.L.ハウ(Annie Lion Howe, 1852-1943)によって『母の遊戯及び育

児歌』のタイトルで神戸の頌栄幼稚園から出版された。²⁰⁾

(2)『幼稚園記』とその内容

『幼稚園記』の翻訳者、関信三は1875(明治8)年、東京女子師範学校の開設とともに英語教師として招かれ、翌年附属幼稚園の創設と同時に初代監事(園長)に就任し、幼稚園教育の基礎作りに尽力した人物である。関は英語に堪能で、ドイツ人の主任保姆、松野クララの通訳を務める傍ら、自ら外国の幼稚園書の翻訳を手がけた。当時、幼稚園書は前述の桑田親吾訳『幼稚園』のみで、関はいろいろな洋書を参照して、『幼稚園記』(1876-77年)、『幼稚園創立法』(1878年)、『幼稚園法二十遊戯』(1879年)を著し、創設期の幼稚園教育に多大な貢献を果たした。

『幼稚園記』は、前述したドアイ(Douai, A.)の“Kindergarten”(1871)を完訳し、それに付録としてH.マン(Mann, Horace 1796-1859)とピーボディ(Peabody, Elizabeth Palmer, 1804-94)の“Moral Culture of Infancy, and Kindergarten Guide”(1869)の一部を抄訳として加えたものである。

付録については、A.ドアイは“The Kindergarten”の序論でピーボディとマンの“Kindergarten”およびE.ウイベ(Wiebe, E.)の“The Paradise of Childhood”(1870)の二書をあわせて読むように勧めており、関はこれによって“Kindergarten Guide”を付録として加えたのであろう。一方、ウイベの書も附属幼稚園でよくもちいられていた。

以上のような書名やその構成から明らかなように、本書は幼稚園教育の実践に役立てるために著されたもので、主に幼稚園で用いられる運動遊戯や歌、詩、物語などを紹介するものであった。先に見たランゲの書が主として遊具遊びや作業の紹介であったのと比べて、作業の紹介は「図画」のみであり、その意味では本書の翻訳はランゲの書の補完をなすもののようである。しかし、関は本書を完訳するが、桑田訳『幼稚園』と同様に、運動遊戯に添付されていた音譜および歌の楽譜47点のすべてを削除している。また歌詞も文語調で翻訳しており、それを幼稚園でそのまま用いることはできなかった。

以上のように、『幼稚園』および『幼稚園記』はわが国の幼稚園開設と相前後して翻訳出版されたものであった。幼稚園教育とは何であるの

かを全く知られていない状況の中で当時の日本人にとって、これらの翻訳書が実践に際して大きな指針となったことは間違いない。その原典は、いずれもイギリス、アメリカにおける基本的な文献であり、それが日本の幼稚園の出発に際し、その参考とされたのである。しかし、すでに言及したように、この二書には幼稚園の遊具遊びや作業についての詳細な説明に対して、運動遊具および歌についての情報が全く不足している。そのことは幼稚園における遊具遊びや作業の導入に比べて運動遊戯の導入の遅れを招くひとつの原因ともなったのではないかと、湯川は判断している。²¹⁾

(3) 関信三による外国幼稚園図書の紹介と受容

明治初期には多くの外国の幼稚園書が輸入され、幼稚園教育の参考に供せられた。同時に、明治初期には翻訳されずに幼稚園関係者の指針となり、実践の参考とされた外国幼稚園書は数多くあったと思われる。この件に関しては1881（明治14）年までに輸入された外国幼稚園図書については、教育博物館の図書目録（洋書之部）に詳しいが、関信三の著した『幼稚園創立法』²²⁾（『教育雑誌』第84号、1878年）には、アメリカの〈スタイガル（Steiger）氏販売ノ幼稚園書籍〉27冊が参考図書としてあげられており、注目される。以下これらの外国幼稚園書を手ぐかりにその特徴を解明したい。

(a) 『幼稚園創立法』における外国幼稚園書の紹介

『幼稚園創立法』は、1878年4月、文部大輔（大臣）田中不二麻呂の要請に基づき、関自身によって著された「わが国最初の日本人による」幼稚園創設の手引書である。

前述したように、関は『幼稚園創立法』において27冊の外国語幼稚園書を参考図書として紹介するが、それは彼自身の参考図書でもあった。これらはすべて英文の幼稚園関係書であるが、ここでは特に、「Steiger氏販売ノ幼稚園書籍」に注目したい。現在、国立国会図書館にはSteiger's Catalog 数種が所蔵され、「幼稚園カタログ」には、表題通りの遊具類と幼稚園関係書籍が図入り、定価入りで詳しくリストアップされている。

湯川の研究によれば²³⁾、これらの書籍の特徴は、第一に、それらはアメリカで用いられていた最も基本的な幼稚園関係書であるということである。

第二は、明治初期にすでにフレーベルの生涯や幼児教育論を紹介する書籍が輸入され、紹介されていることである。M.H. クリーゲの“The Child, its Nature and Relation”（1872）やまた同氏の“Fridrich Fröbel”（1876）、J. Payne の“Froebel and the Kindergarten System of Elementary Education”には、フレーベルの生涯や幼児教育理論がわかりやすくまとめられており、これらの書籍から当時の人々はフレーベル主義幼稚園の本質を看取し得たのである。

第三は、にもかかわらずというか、幼稚園教育の実践書、特に技術書が数多く紹介されていることである。しかも大部な書物ではなく、50頁程度の小冊子が多いのである。翻訳上の困難さもあるが、今日の「ハウツウ」ものである。再度、関がどのような外国幼稚園書を利用し、『幼稚園創立法』を著したかを考察しその特徴を考えたい。結論的には、湯川の言葉を引用すれば、関は米国幼稚園関係書を「モザイク的に受容」したといっていよい。例えば、「始祖ノ略伝」（フレーベルの略伝の意味）では、クリーゲの“Friedrich Fröbel”と正確に対応して叙述している。また「開園ノ原因」と「設立方法」ではマンとピーボディの書物が利用されているといった具合である。

まとめ

以上のように、関の『幼稚園創立法』は、クリーゲやマン、ピーボディの書物、シュタイガー社の幼稚園カタログなど、米国の幼稚園関係書をもとに著されたものであった。そして、その摂取はシュタイガー社のカタログ類から多くをとっていることから窺われるように、非常にまばらで、多くの要素が混在して摂取されており、原書の十分な吟味がなされているとは言いがたい。つまり原書の持つ一貫性が失われているのである。きわめて日本式的な摂取の仕方である。しかしながら、関が1878（明治11）年という非常に早い時期に“Friedrich Fröbel”を読み、フレーベルの生涯やその思想に触れていたことは注目されよう。

従来、明治機初期の幼稚園教育の導入については、真にフレーベルの精神に学ばず、恩物（Gabe）の操作など技術的な側面の摂取にとどまったが故に、恩物中心の形式的保育に傾斜したと一面的に考えられてきた。確かに、当時の幼稚園では恩物の使用に重点が置かれて、授

業が展開されていた。しかし、幼稚園関係者がフレーベルの思想、理念について全く学ばなかったのかと言えば決してそうではない。関信三ら創設期の幼稚園教育の基礎を築いて人々は、フレーベルに関する書を一面的ではあったが数多く読み、それを日本化して幼稚園教育の指針としていたのである。

だが、より根本的な問題は、冒頭の〈スローガン〉で示唆したように、明治初期にわが国で導入された幼稚園に関する二つの思想的源流が並列されたままに紹介され、その思想を生み出した諸外国の幼児に対する思想の状況や実態を十分な吟味もないままに受容されたことである。そこには二つの幼稚園観の根本を吟味することのないままに受容する、わが国の思想・制度の受容にみられる一般的傾向が如実にみられるのである。具体的には、アメリカやイギリスの事例に見られる〈実用主義的幼稚園〉型と、J.J. ルソーや J.H. ペスタロッチーの思想を展開し、ドイツ化した幼児中心の〈理想主義的幼稚園〉型の系譜である。この統合の困難な二つの幼稚園の〈型〉の存在を深く吟味することなく、実用主義的に「恩物」中心の形式的で画一的なハウツーものの指導法（教授法）で実践したところにわが国の幼稚園の特徴があるのではなかろうか。その特徴の尾骶骨は今日にまで及んでいると筆者は判断している。

（以下、(4)「恩物」の受容、(5)「遊戯」の受容を考察しなければならぬが、今回は第一報としてこの報告を終える。なお、本論考の人名事項に関しては、日本ペスタロッチー・フレーベル学会編増補版『ペスタロッチー・フレーベル事典』、玉川大学出版部、2006年を参照した。）

注

- 1) 『文部省雑誌』, 1873 (明治6), 文部省.
- 2) 『文部省雑誌』, 第27号, 1874 (明治7).
- 3) 『文部省雑誌』, 第3号, 1875 (明治8).
- 4) 『文部省雑誌』, 第4号, 1876 (明治9).
- 5) 同上. (上記号数のうち1874年27号に注意!)
- 6) 『教育雑誌』, 第24号, 1877 (明治10年).
- 7) 同上, 第29号, 1877 (明治10年).
- 8) 同上, 第48号, 1877 (明治10年).
- 9) 同上, 第55号, 1878 (明治11年).
- 10) 同上, 第58号, 1878 (明治11年).
- 11) 同上, 第84号, 1878 (明治11年).
- 12) 関信三『幼稚園記』全4巻, 文部省.

- 13) 『教育雑誌』, 第48号, 1877 (明治10年).
- 14) 『教育雑誌』, 第86号, 1878 (明治11年).
- 15) 湯川嘉津美「近代日本における幼稚園教育成立過程の研究」(広島大学教育学博士論文), 1996.
- 16) 岡田正章「明治初期における幼稚園論の研究(その1)」, 所収, 東京都立大学『人文学報』1963.
- 17) 湯川, 上掲書, 120頁.
- 18) 湯川, 上掲書, 121頁.
- 19) 湯川, 上掲書, 125頁.
- 20) A. L. ハウ『母の遊戯及び育児歌』, 頌栄幼稚園, 1942年.
- 21) 湯川, 上掲書, 129頁.
- 22) 関信三『幼稚園創立法』, 文部省, 1878年.
- 23) 湯川, 上掲書, 141頁.

図1 文部省雑誌 第二十七号（明治7年12月28日）

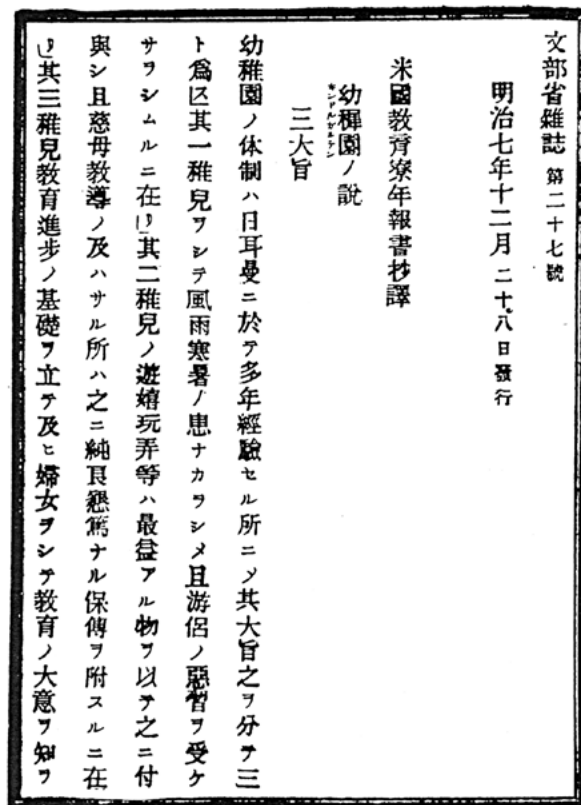


図2 教育雑誌 第四号（明治9年5月15日）

